

---

# 猿の手妖怪指 5 本

カービー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猿の手妖怪指5本

### 【Nコード】

N6281A

### 【作者名】

カービー

### 【あらすじ】

猿の手を手に入れた芦崎隼斗あしだきかいとは、猿の手の伝説5つの願い事により、猿の手の主……。いや、隼斗の神様でも言える猿の妖怪カミと一緒に低脳な奴等を殺していく。だが、芦崎隼斗に待ち受けるものとは……。

## プロローグ（前書き）

初めまして。カービーと申します。  
猿の手は代々昔から伝わるモノなので、イメージを崩さないように  
作品を書けあげたら嬉しく思います。温かい目で見て下されれば  
とても嬉しく思います。

ブローグ

猿の手を手に入れなければ

僕は今生きていなかった

人生に不愉快を感じだした僕は

猿の手を手に入れた

世界に一つしかない

妖怪の猿の手を

ありがとう猿の手

この世に感謝するよ

## 第1話：「静まりかえる教室」

俺の名前は芦崎<sup>あしざき</sup> 隼斗<sup>かいと</sup>

現在高校一年生16歳

「おい、隼斗！この宿題教えてくれよ」

クラスメイトの一番馬鹿が俺に宿題の問題を聞いてくる。

俺、こいつの事あんまりスキじゃないんだけどな……。

そんな事を思いながら教えていた。

「ちげーよ！何でここが2になるんだよ」

教えているけれど……。

コイツの馬鹿さ加減に腹が立つ。

「どうなるんだよー！あーあ！隼斗みたいに頭良くなりたい」

そう言って鉛筆を指でまわしながらため息をつく。

ため息尽きたいのは俺の方だ。

「おーこうなるんだ！やっぱお前頭良いな！ありがとう」

そう言って自分の席に戻っていった。

俺は学年で一番頭が良い。

皆からもそう思われているし、自分でもそう自覚している。

もちろん、勉強度は人並みより精一杯しているからだ。

だから

”頭良いねー、脳みそ交換してほしいよ”

とか言われるのがイラついてくる。

帰りに爺ちゃん家に寄ってみるか……。

ここら辺の近くだしな。

お小遣いもほしいし。

俺はそんな事を思いながら外を見ていた。

何故かクラスはホラー好きなやつらが多かった。

「ねえねえ隼斗君」

そう言つてクラスの女の子が俺に話しかけてくる。

何だよゼーな……。

「何」

俺はそっけなく返事を返す。

クラスの女の子は困ったような表情をみせる。

「怪談系興味ない？」

「怪談？」

「例えばー……こつくりさんとか」

正直俺も少し興味はあった……。

興味がないと言えば嘘になる。

「興味あるけど」

俺がそういうとクラスの女の子は調子にのって

俺に質問攻めてくる。

「今度、学校の夜を探検しようよー」

は……？

いやだし！

「二人でー？」



そう聞くと何故かクラスの女の子は黙って顔を赤らめる。

またか……

俺は一週間に2、3回は告白されるから、女の子のそっけない行動が分かってしまう。

俺の何処が良いんだか。

気づいてない振りをしてみせる。

「怪談系というのが興味ある？」

クラスの女の子は話題を変える。

” ” というの ” ” っていわれても……。

こつくりさんとか、ありきたりなのイヤだし。

カッコイイこと言ってみるか……。

「猿の手」

俺が一言こう言つと何故かクラスは静まりかえった。

## 第2話：「うち解けなくなったクラス」

「猿の手ってなんだよ……」

一人のクラスメートの男の子が俺に向かって笑いながら言うてくる。

俺は少し頭に血が上って暴言を吐いてしまった。

「猿の手しらねえのかよ……馬鹿にもほどがある」

俺がボツソリそう言うくとクラスの奴等は俺を遠い目で見る。

俺の体に何故か緊張が走った。

でも誤らない……

何も悪いことは言っていないから。

「っでさー！どーする？怪談……いつにする？」

俺を抜かしてどうやら話し合いを始めた。

学校で怪談系をするらしい。

俺は無理やり話題に入ろうとはしなかった。

こいつ等の低脳に驚かされている俺も馬鹿だと思ったからだ。

数人の連中が俺に向かって嫌みな事を言うてくる。

「天才君はまったく困っちゃうよな〜！少し頭が良いからって俺たちを下にみれるんだもんな」

は……？

失せろ、低レベルなガキ共が。

「天才じゃねえーよ」

俺はそう言っただけで文句つけてくる奴等をガン見した。

「やっぱ……クールだね！」

俺の事をそう言う女子にも腹が立ちガン見した。

これで、クラスにもうち解けなくなった。

そう思うとスッキリする。

いつまでこんなクラスに居なくちゃいけないんだ。

俺は後々そんな事ばかり考えていた。

「もう嫌」

俺はボソッとそう言い席を立ち授業中にも関わらず帰る準備をした。

「芦崎、まだ午前中だぞ、保健室にでも行ってそのまま早退する」

のか？」

生物の教師が俺にチヨークを向けながら言う。

なんでこんなアホな脳で教師が務まるのだろう……。

単に教科書読んで、教科書通りにプリント印刷して穴埋めにしてるだけの授業なんて、たかがしれている。

それより家に帰って自主学習をした方がマシだ。

「面白くないから帰る」

俺がそう言っただけを背負うと

俺の二つ隣の席の奴が憎い言葉を発してくる。

「学校来る意味あんのかよ」

俺はその言葉を聞いてムツとした。

一応俺の学校は進学校で頭も良いと言われている学校だ。

だから、どんな学校か入学はしてみたが……。

ありえないくらいにツマラナイ授業に一日目で覚めてしまった。

それから良くこうやって早退する事が多くなった。

でも、テストで常に一番を勝ち取っているから別に良いと思ってい

る……。

俺はソイツの言葉を見殺して教室を出た。

靴箱に何か封筒付きの手紙が入っていた。

>> 放課後、校舎裏で待っています<<

中身を見てみるとそう書かれていた。

またか……。

俺はそう思いその手紙をビリビリと破ってゴミ箱に捨てた。

恋愛とかダルの俺にはできるか……。

俺はまだ初恋がない。

彼女ほしいとも思わない。

居ても邪魔になるだけ。

そう思っているから……。

### 第3話：「恋愛なんてできるかよ」

「あれ……隗斗君？」

一人の女の子が話しかけてきた。

あれ……。

今授業中じゃないんだっけ？

俺はそんな事を思っていた。

「そうだけど」

「あ、手紙下駄箱に入れた梨園<sup>なしその</sup> 美優<sup>みゆう</sup>です……」

女の子は下を向いて顔を赤らめながら俺に言う。

俺は今の状況をすぐに把握した。

ああ……。

手紙、それなら捨てちまったよ。

「読みました」

俺は適当な事を言った。

捨ててしまったけれど、読んだことには変わりはないのだから。

「あの、隗斗君の事がスキです」

は……？

俺はいらだつてしまった。

俺の何処を見て言ってるわけ？

何処がいいの？

性格……それとも……顔？

「ごめん、俺は……」

そう言つてわざと困つたような顔を見せた。

俺の演技っぷりにダメされる奴も多い。

その女の子は泣きながら何処かへ言つてしまった。

はあ……。

俺はため息をつきながらゴミ箱に捨てた手紙を見た。

これ、見つかったらやっぱり傷つくよな。

俺はそう思つてビリビリに破つた手紙を綺麗にひらつてポケットに入れた……。

恋愛なんてそんなちつぽけな事。

時間の無駄なんだよ……。

俺はそんな事を思いながら爺ちゃんの家へと向かった。

相変わらず変わってないなこの家も……。

「おー！隼斗！良く来たな」

爺ちゃんはそう言って俺を出迎えてくれる。

爺ちゃんは結構顔がやつれていた。

歳を取ったからだろうか？

「爺ちゃん少し痩せてねえ？」

「そんな事はないぞー！元気だ」

そう言って腕を見せてくる。

腕を見せてくれても……。

でもなんか安心する。



#### 第4話：「手に入れた猿の手」

「爺ちゃんさっきまで何してたの？」

「それが、凄いものをみつけたんだよ、さっき小屋を掃除してた時  
なんだけどな……」

爺ちゃんがギラギラとした目で話す。

俺もつられてワクワクした表情になっていた。

とりあえず小屋に行ってみることにした。

爺ちゃんは大きい箱に入っている手紙らしきものと、布で包んである何かの……ミイラみたいな手を差し出してきた」

なんだこれ……？

「昔からこの家にだいたい伝わるものなんだよ」

爺ちゃんはそう言っつてミイラみたいな手を眺めている。

「それ……一体なんなの？」

爺ちゃんがあまりに嬉しそうに眺めているから。

ふと聞いてみたくなった。

爺ちゃんは真剣な表情で俺にこの言葉を口にした。

「猿の手だ」

猿の手……？

俺は一瞬頭の中が真っ白になった。

これが猿の手？

俺は猿の手を爺ちゃんから強引に奪うように手に取った。

これがあれば……。

コイツが俺の願いを叶えてくれるんだ。

「爺ちゃん、これを俺に下さい」

俺はつい猿の手ほしさのあまりに口調が敬語になってしまった。

爺ちゃんの反応は凄かった。

そりゃそうだ……。

猿の手は指が5本ある。

つまり5回願い事が叶えられる。

そして最後には……。

「駄目だ、いくらお前でも猿の手を使用することは許さん」

爺ちゃんはそう言って俺から猿の手を奪い取る。

だつて……。

あの猿の手だ。

皆ほしいに決まってるじゃないか。

でも……。

「何で猿の手を？」

俺がそう聞くと爺ちゃんは首をかしげた。

分からないのか……。

まあ、良い。

これさえあれば俺の思い通りに人生が動くんだ。

「お願い爺ちゃん……」

俺は泣きそうな顔を爺ちゃんにして見せた。

爺ちゃんは困ったような表情を見せる。

そして、ついに……。

「わかった、猿の手をおまえに授けよう、でも……」

わかってる。

最後どうなるかくらい。

猿の手の伝説を知らないで言ってるわけじゃない。

俺もそんな馬鹿じゃないよ。

「ありがとう、爺ちゃん……最高のプレゼントに感謝するよ」

俺は、ニコッと笑った顔を見せ手を振り猿の手を見つめながら時間をかけて家に帰った。

これからゲームが始まるんだ。

## 第5話：「ようこそ妖怪カミ」

ベッドの上でずっと猿の手を眺めていた。

さて、猿の手をどう使いこなそうか。

「猿の手……俺の元に舞い降りてきてくれて嬉しいよ」

俺は内心猿の手に話しかけても何の変わりもないと思ったが……。猿の手にも一応お礼を言わなくてはならないと思ったからだ。

これからコレで思う存分楽しめるんだ。

「とうとう俺も楽しめるな」

そう言っただけで猿の手から出てきた。

何だ！？

化け物？幽霊？妖怪？

俺は顔が引きつってしまった。

化け物か幽霊か分からない猿の顔をしたヤツが俺の方をジッと見て笑っている……。

俺の額に汗が流れ落ちる。

ヤツの顔はとても怖い。

目は鋭く、口からは牙が出ていて……体は骨状態だ……。

鼻も潰れている状態で血管らしきものが体中に見えている。

「どうした、俺が怖いか？」

ヤツはそう言っただけ顔を気持ち悪いくらいに微笑ませる。

怖いなんて……

「怖いなんて思わないさ、これから楽しいゲームが始まるんだ」

俺が無理笑いをしているとヤツも笑った。

「ビリビリと背筋に血が上る願い事してくれよ」

ヤツはそう言っただけ俺に触れる……

「お前……何者だよ」

俺は顔を青ざめながらヤツに質問した。

「俺は猿の妖怪さ、その手は俺のものだ……俺は地球が生み出される前に誕生した……たった一つの妖怪さ」

なんだそれは？

地球が生み出される前に？

「まあ……大きく言えば妖怪だ、名前は……カミ」

そこでヤツについての簡単な説明は終わってしまった。

カミ？ありきたりな名前だな。

そう言っただけカミという妖怪は自分の頭をボリボリかき始めた

「カミか……」

俺はそう言っただけ猿の手を撫でる。

カミは俺の方を見てニヤリと笑みを浮かべる。

「そうさ……お前にとって俺は神だろ？お前の願い事を叶えてやるんだからな」

俺は腹を抱えて笑い込んだ。

そういう意味だよ。

まあ良い……

「確かにそうだな、俺の名前は芦崎隼斗だ」

そう言っただけカミと俺は握手をした。

カミの手はぬるぬるしていて冷たかった。

猿の手も神様も揃った所でゲームスタートって所か

面白い

「楽しませてやるよ……カミ……」

「もう願い事は決まっているのか？」

カミは俺の顔をのぞき込むように見る。

俺は嫌みな笑顔をカミに見せた……。

「ああ、とりあえすな」

俺がそう言つとカミも笑い出した。

「ハッハッ……どんな願い事なのか言ってみろよ」

カミはそう言つて自分の猿の手を触る。

「低脳な奴等を全部殺したい」

俺は変わらず嫌な笑顔をカミに見せた。

カミは少しビククリした表情を見せたが

すぐに表情は元に戻り笑っている。

「ハッハッハッ……面白い願い事じゃねえか」



「だろ？」

「今すぐ叶えてやろうか？その願い」

カミはニヤニヤと笑いながら俺に言う。

今すぐか……

「いや、明日からで良い」

俺は再びベッドに横になった。

そう言うとかミは俺のノートを手に見だした。

「……………」

俺はそんなカミの様子をズット見ていた。

「わかんねえな、こんなのを教えて貰っているのか」

カミはそう言っただけで難しい顔をしている。

意外と面白いヤツだな”カミサマ”は……。

「ああ……けど、全然授業出てないけどな」

俺はそう言いながらカミからノートを取り上げた。

無表情でノートをペラペラとめくる。

そしてノートを机に投げ捨てた。

「…………カミの指は何本なくなるんだ？」

俺は笑うことなく真剣にカミに聞いた

カミはニヤニヤと笑いながら

「そうだな…………3本くらいか…………？」

3本も！？

そんなになるのかよ

「今”3本も”っておもっただろ？」

俺はカミの言葉に思わず声をあげてしまった。

「何で…………」

「思ってることくらい分かるんだぞ、低脳の奴等を全て殺すんだ3本くらいの価値ねえとな」

俺はその時ふと思った。

いったいこの猿の手の価値はどんなに凄いんだよ…………。

「3本消えてくれて良いよ…………それで、低脳な人物が死んでいくなら…………だけど、俺の目の前で殺してくれ」

「ああ……いいさ、了解」

カミの不気味な笑いは俺の心を締め付ける。

3本消えるのか。

つてことは……

あと願い事残り2回。

2回で十分だ。

ありがとうカミ……

面白くなりそうだよ。

## 第6話：「演技と死」

翌朝俺は学校に向かう準備をする。

「カミ……今日からだ……」

俺はカミに真剣な顔をして言う。

「ああ、分かっている」

カミはそう言って猿の手の中に戻ってしまった。

俺は猿の手を大切に鞆に保管した。

芦崎隼斗……俺は、犯罪者になるのか？

いや、犯罪者は殺してくれるカミだ……。

俺は犯罪者なんかにならない。

そう自分に言い聞かせ教室に入った。

昨日の途中からクラスの連中は俺に冷たい暴言ばかり吐く。

そして今日も……。

「お前、そろそろ学校やめれば？」

「お前がやめれば？」

普段は無視するが今日がコイツの命日なんだ。

だから少しくらい相手してやろうと思って負けずに言い返す。

俺は席に着き鞆に入っている猿の手をこすった。

（おい、カミ聞こえるか……？）

俺は心の中でカミに話しかけた。

（ああ、きこえるさ……）

カミの声が聞こえたと同時に俺の顔に笑みが浮かび上がってきた。

（アイツを殺してやってくれ）

（ハッハッハッ……了解、こういう風に殺してほしいかとかあるか……？）

俺は頭に手をやり考え込んだ。

どいう殺し方でもできるのか……？

まあ、良い最初は軽い死に方で殺していこう。

（アイツの首を絞めるだけで良い）

（（了解……神様に感謝しろよ……））

カミはそう答えた後にすぐに俺に暴言を吐いた奴の首を閉め始めた。

「ッッ……！？ゲホッ……なんだ……」

ヤツはあまりの苦しさに関自分の首に手を当てながら床に寝転がってしまった。

クラスは大騒ぎになった。

（カミ、もつと首を締めて良いよ）

俺がそう思うと当時にカミは俺の思考を聞き取ったのかヤツはもつと苦しみ始めた。

「ウヴ……カハッ……ガアアッ……」

「誰か、救急車を呼んで……」

慌てるクラスの連中。

それにも関わらず俺はカミにずっと指示していた。

皆から見れば、天才の隼斗でもどうして良いか分からないと様子を俺は見せている。

「かつ……隼斗……どうすれば」

ヤツの親友が俺に話しかけてきた。

そうコイツも俺に暴言を吐いた奴だ。

俺は内心笑いに包まれていたが外面だけ焦る振りをしてみせる。

「とりあえず、落ち着け……救急車は呼んだのか？」

「ああ、さっき救急車を呼んだッ」

苦しんでいるヤツの親友の表情は見る見るうちに青ざめていく。

そりやお前の友達が死にそうな状況だったら、どうして良いかわからないから青ざめるのも無理はないよ。

「大丈夫かよ……お前まで死にそうな顔されちゃ俺どうして良いかわからないんだ！しっかりしろよ」

俺は必死で親友を励ます演技を続けた。

（おい、カミ……救急車が学校に来たらヤツをいい加減死なせてくれて良い……もっと、ヤツの苦しむ姿と哀れなクラスの連中を見ておきたいからね）

（ハッハッハッ、つくづくお前もヤな奴だな）

（ハハハ……まあね、俺が殺しているわけでもないんだし別に良いだろ）

俺がそうカミに伝えたとカミからの返事が返ってこない。

どうした……？

一瞬の沈黙が俺とカミの間に流れた。

すると

カミは笑いながら俺に返事を返してきた。

（でも、指示して俺に殺させているのはお前だせ……俺は妖怪……人間じゃない、殺人者はお前なんじゃないか？ 隗斗……）



## 第7話：「俺は正義なんだよ」

俺が殺人者……？

でも、皆俺が殺している事は分からないに決まっている。

もし、殺人者で、あの世が……天国と地獄になっているのなら、俺は地獄に行くというのか？

面白い……。

絶対地獄には行かない方法俺はとっくに見付けてるんだよ。

それは最後の願い事だからな。

（俺が今の時点で殺人者を言うことか……？）

カミは俺に笑いかけながら

（（そうだぜ、どうする？今ならまだ間に合うが……））

と言ってきた。

せつかく面白いゲームが始まったばかりじゃないか。

終わらせる気なんてないよ。

（いや、この時点で殺人者になったのなら、俺は最強の殺人者にな  
ってやるよ）

俺はそうカミに想い伝えニヤリといやしい笑いを見せた。

救急車が学校に到着した。

ヤツは涙を流しながら苦しんでいる。

（カミ……そろそろトドメを刺せ）

「グアアアアア！！！」

ヤツは大声で叫びをあげ、数分後には静かになった。

ヤツはとりあえず病院に運ばれた。

クラスの不安感とざわつきは消えない。

ハハハ……ザマアミロだ、ヤツみたいな低脳が俺に殺されていくんだよ。

その後は放課になってしまった。

放課か……せつかく面白くなってきたと言つのに……ハハッ、まあ良しさ。

家で自主学習、つまり次の犠牲者をゆつくり考えてやるよ。

「なあ隼斗、久しぶりに一緒に帰ろうぜ」

あまり仲良くなかったハズの古池<sup>こいけ</sup> 崇<sup>たかし</sup>が俺に話しかけてきた。

何だ……？珍しいこともあるものだな。

今は気分が良い、一緒に帰ってやるか……。

俺はそう思い、ゆっくりと微笑んだ。

一緒に帰っているが、沈黙で何の話題もない。それに耐えられなくなったのか古池は、今日の教室で起こった出来事を話し始めた。

「今日ビックリしたよな……まさか、アイツが倒れたとかー」

「まあな。俺もビックリしたよ……」

「さすがのお前も、アイツの親友の表情が青くなっていった時は、一生懸命励ましてあげてたもんな、俺あれには感動した……」

「ハハハッ……」

古池の発言に俺は素で笑ってしまった。

あれは芝居なんだよ……。ああでもしなくちゃ何の感心も見せない俺が犯人扱いになってたかもしれないだろ？

クラスで嫌われ者の俺が犯人扱いなんて。疑われたら、たまらないからな……

「そりゃ、一生懸命励ますさ……普段酷いこと言われたって、クラスメートだからな」

俺の発言に目を輝かせる古池。

何処まで馬鹿なんだよ、お前も……。

「それじゃ、俺こつちだから」

「おう、またな……」

俺はそう言つて古池が見えなくなるまで手を振り続ける演技をし続けた。

低脳なヤツから消していく。残念だな、古池……

お前の命は明日で終わりだ。

「おい、隼斗……俺のデキはどうだったよ？」

カミが俺に話しかけてきた。

俺も上等な笑みでカミに笑い返す。

上等だったよカミ……

「まあまあだな、明日も頼むぜ」

俺は思っていることと裏腹に、辛口で判定した。

「まあまあかよ、明日はどんな殺し方でいくつもりだ？」

「そうだな、まあ……一緒に家に着いたらゆっくり考えようじゃない

いか」

俺がそういうとカミは恐ろしい笑いをして見せた。

殺人者も悪くねえな。

だが、俺は自分の事を殺人者なんて思わないよ。むしろ正義の味方  
と  
思  
っ  
て  
い  
る  
く  
ら  
い  
だ  
か  
ら  
な  
……。

## 第8話：「油断は禁物」

「隼斗ー！ 今日あなたのクラス倒れた人が居たんだって？」

家に帰るといきなり母さんが大声を出して玄関に現れた。

もう噂になってるのか……

「ああ……死ん……」

俺は言いかけた口を急いでふさいだ。

「何があつたのよ、ねえ……」

「分からない。いきなり倒れたんだよ」

俺はとつさに”死んだ”と口にする所だった。

まだ……”死んだ”と学校に知らせはきていない。俺たちは知らないことになってるんだ……。ここで、口を滑らせたら終わりだ。

「ちょ、隼斗！」

母さんの言葉を見捨てるかのように、俺は自分の部屋に急いで戻った。

「どうしたよ、隼斗」

部屋に戻るとカミが俺の急変した様子に心配してくれた。

「ハハッ……」

俺は苦笑いをして見せる……。顔が真っ青なうえに額に汗をかいていた。

「大丈夫か？」

「ああ、大丈夫さ……」

俺はそう言って落ち着くように、ベッドの上に寝転がった。

「さっきはどうしたよ？」

カミは俺の上に乗っかるように俺に顔を近づけて質問する。

「思わず、”死んだ”と言うところだったよ……」

俺はカミから視線を外してから言う。

「言っても良かったんじゃないか？何の害もないだろ？」

「言ったら何もかも終わりじゃないか。まだ、学校に知らせはきてないんだぞ……。母さんが口を滑らせて、違う人に言ったら、何故知っていたんだと言うことで俺が、疑われるかもしれないだろ？」

俺は手を頭にあててカミに言った後に深呼吸をして、心を落ちつかせた。1ミリの油断も禁物だ。

「ああー……なるほどな」

カミは理解したのか首を盾に振る。

「殺人者も大変だな。」

「ああ、大変さ……」

俺はそう言いながら、ベッドの側を離れ、制服をハンガーにかけ始めた。

油断禁物のゲームだな。

おかげで寿命が縮むよ……。

制服をハンガーにかけ終えたら、机に教科書を広げ鉛筆を机の上でコツコツと鳴らしていた。

「何やってるんだ？」

カミは教科書を取り上げて眺め始めた。

「勉強だよ」

俺はそう言いながらカミから教科書を奪い取った。

「へえ……偉いな」

「ハハッ、一応大学行こうと思ってるからね」



勉強はコレくらいで良いか。

俺はそう思い、教科書を閉じ……机の上を片付け始めた。

「さて……。どうするか、明日」

俺はカミの方を見て微笑みながら言う。それに答えるかのようにカミも俺に笑みを浮かべみせる。

「どついつ殺し方をするんだ？」

「そうだな……今度は別の殺し方で殺してみたいね。」

俺はそう言つと、冷蔵庫に入っているケーキが食べなくなったので取り出して自分の部屋に持ってきて、食べ始めた。

「ハッハッハッ……まあ、お前が明日殺したい時に指示してくれれば別に言わなくても良いけどな」

カミは俺が食べているケーキを一つまみし自分の口に運んだ。

「んお！　なんだこれは……美味しい」

よほどケーキが美味しかったのか、全部カミに食べられてしまった。

明日は昼までか……。

今日死人が出たので、午前で終わりの予定になっている。

時間制限は放課後まで……



## 第9話：「最高のゲームの幕開けだ」

「それじゃ、もう寝るかな」

俺は風呂も入らずに、夜食も食べないまま眠りにつくとうとしていた……だが、その時。

カミが俺に衝撃な言葉を言ってきた。

「お前があと願回事二つ言ったら俺は消える」

え……？消える？

「何で」

「何で」って……。俺はお前の願回事を叶えるために今ここに居るんだ。残り二つ叶えてしまえば、俺の役目は終わるんだ。そして俺は……」

そう言い残すとカミは眠りについてしまった。

確かに。カミの言うとおりだ……。カミは俺の願回事を叶えるために今ココにいる。カミは俺にとって神様なんだから……。でも”そして俺は……”の続きは何だ？

俺はそればかり気になっていた。

だが、カミを今無理やり起こす訳にもいかない。

俺は気になりつつも眠りに入った……。

「おい、隗斗起きろ」

カミの言葉で俺は目が覚める。

俺はさっそくカミに昨日の事を聞いてみた。ずっと昨日の事が気になっていて俺は額に汗をかいていた。

「カミ……昨日の事。続き話してもらおうか」

カミは少し不安そうな顔をした。今までカミの不安そうな顔は見たことがなく、俺に緊張が走った。

「お前の真実も知ることになるぜ？」

ああ、良しさ。どんな事でも俺は覚悟できている。

「話してくれ」

カミは窓の外を見ながら俺に話し始めた。

「お前の願い事をあと二つ俺が叶えたら……俺は封印が解けてあの世にいく。俺は、俺の手……通称”猿の手妖怪指5本”の呪いを受けている」

猿の手妖怪……？呪いを受けている？

一体どういう事なんだ。

カミは深呼吸をし心を落ち着かせ再び話し始めた。

「猿の手妖怪指5本の伝説……それは、この世に妖怪が誕生した時。妖怪は妖怪に産まれてきた罰として、人間のために願い事を5つ叶えてあげなくちゃいけない。それで、神様から妖怪に下された罰は終わる……つまり、神様から許して貰える」

俺はベッドの上から下り、カミに勢いよく怒鳴った。

「そんなのおかしいじゃないか……カミは妖怪に産まれてきたくて妖怪に産まれたんじゃない。そんなの、間違ってる」

「でもこれが伝説なんだ。妖怪の”決まり”なんだよ……。」

”決まり” そう言われたら何の言葉も出てこない、自分が憎く感じた……。カミは俺の不安そうにしている表情を無視してそのまま話し続ける。

「隼斗……、二つの願い事が終わったらお前も死ぬ」

俺の心臓の音はいきなり早くなる。

分かっていただき、そんな事。だからその手はもう打ってあるんだ。でも、直接お前の口で言われたら俺の思考が二重……。

「お前も、俺も死なない方法を見付けてあるから大丈夫さ。俺は二つの願い事が終わっても死なない。そしてカミ……お前もだ」

俺がそう言うとカミはやっと少し笑みを見せた。

残り二つの願い事が終わって死ぬ運命なんて……。そんなの望んでいないんだよ。

生きてやるさ。

どんな手をつかっても……。

「そろそろ学校に行くとするか」

俺は制服に着替え何も食べずに家を出た。

「隼斗ー！！ 担任の先生から連絡が今さっきあって、学校休みみたいよ」

母さんは俺に叫びながら言う。

学校休み……？まあ、昨日の事があつたから学校休みになるのも無理ないな。でも、これじゃ俺のせつかくの計画が……。

「ああ、今戻るさ」

俺は下を向いてゆっくりと自宅に向かう。

「隼斗、残念だったな」

カミは猿の手から出てきて俺にニヤ笑いをする。

そんなカミに俺もニヤリと笑みを見せた。

「まあ、良いか。今日は休憩さ」

「今日も家に居るのか？」

カミは退屈そうに俺に悲しい声で問いかける。

そうだな……。たまには出かけるのもいいか。遠い所に行つて、他の低脳を殺すというのもまた賛成できる話だ。

「離れに行くか」

俺は母さんにお小遣いを貰つて、新幹線に乗り、東京の渋谷に行く。

「キャハハッ、私なんて親父をさ……」

不良の声が、うるさく聞こえる。

「……………」

「どうした、隼斗」

「全員殺したくなる」

俺はそう言い側にあつたベンチに座り渋谷の周辺を見渡した。

低脳な奴等を消していく……。時間はものすごくかかる目標だ。一気に殺しても良いが、そうすれば、たちまちニュースで放送され、世間の話題になるだろう。ますます面白くなるかもしれないが……。

……覚悟はいる。

俺は顔にタオルを当て、考え込む。

「俺から遠くに離れることはできるか？」

俺はカミに睨みつけた風な表情を見せながら言う。

「……ああ、遠くでも殺すことはできる。低脳な奴等を殺す<sup>〓</sup>3つの願い事を終えたコトで、取引してるんだからな 猿の手と妖怪<sup>オレ</sup>を馬鹿にするな……」

ハハハッ、悪いな、カミ……。そうだったな、低脳の奴等を殺すことで”猿の手”と取引している事を忘れるところだったよ。

面白くするには……何か痕がほしい。できれば”バラ”を一輪置くとか……。証拠になるもの。単に殺していくのも面白くない。

「どうしたよ？」

「カミ……何か痕が欲しいんだ。殺した証拠になるコトが」

カミは俺に不安そうな顔をする。

「だが、痕が残るようなコトをしたら、お前が追いつめられるかもしれないんだぞ」

「わかってる。それが面白いんじゃないか……心配するな」

俺がそう言って軽い笑いを見せると、カミも俺に微笑んでくる。



「俺が額に入るくらいの大きさで、毎回血で”死”って書いてやるよ」

”死”か……。分かりやすいな、それは良いアイデアだ。

「じゃあ。カミ……頼むよ」

面白くなってきた。

これから、世界は俺中心で動くんだ。

ここからが本番なんだ。

最高のゲームの幕開けだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6281a/>

---

猿の手妖怪指 5 本

2010年10月23日01時13分発行